

『大平弾正の墓』

大平弾正の墓は、奥湊川字殿奈呂にあり、南北朝期の奥湊川城主・大平弾正の居館跡と伝えられ、城址はこれより北へ500mの城山にあります。

※昭和47(1972)年大方町文化財指定。



■大平弾正

弾正は当時、奥湊川の領主または押領使ということになっていますが、当時の幡多の領主は一条氏であり、弾正の場合は、領主というよりも、武芸に長けた者が地方の警察の役目を務めた押領使のほうが適切でしょうか。

しかし、実際は土佐の守護代が任命した大方郷の幕府の荘園、公領を管理支配する地頭ではなかったかと思われれます。

大平弾正を土佐の守護代が任命した地頭だとすると、今まで南朝の忠臣と言われてきた弾正は、一転して幕府方の役人ということになります。

これは、今までの「忠臣大平弾正」という定説を覆すことになりませんが、当時の時代感覚では、北朝・南朝のいづれが正統であるか、明確ではなかったのではと思われれます。

前身は幕府の押領使(地頭)であったとしても、行動は節義を重んじた誠の人であったと言うことができます。

■弾正の軌跡

シリーズ第3回(6月号)「尊良親王御上陸地記念」でも紹介したとおり、親王が王無の浜に着いた時、大平弾正がお迎えに参ったと、どの文献をみても書かれています。これは貴人に対する表敬表現で、弾正の自発的な行為ではなかったはずであり、警固の役人が、

素性の分からない人間に親王を渡すはずがないものと思われれます。最初は幕府方であったとしても、弾正が親王に対する忠誠心を持っていたことに疑いはありません。

奥湊川にお迎えして親王を警固しているうちに、その人柄に接して「この皇子のためなら」と思うようになったのではないのでしょうか。

■弾正の子息(伝説)

弾正の子息・大膳が、越前・金ヶ崎城で尊良親王に殉死したという伝説などから考えても、大平弾正に二心はなかったはずで

■弾正横通り(伝説)

弾正の館の下、口湊川は当時北条氏の勢力圏であり、道中を案じた弾正は、本道避け、近くの大森山を越え、柚道に分け入り、今もその名の残る「弾正横通り」の難所を踏破して、大平の館に親王を迎えました。

■高岡郡蓮池城主の大平氏

『郷土史辞典(高知県編)』を見ると、土佐の守護・地頭の解説の中で、高岡郡蓮池城主の大平氏も、

勢力範囲と活動状況から見て、守護代ではなかったかと思われれる、と書かれています。

蓮池城主の大平氏が守護代でなかったとしても、当時鎌倉幕府に近い守護代級の豪族であったことは争えませぬ。

現代の土佐市に本拠地を持った大平氏は、井の尻(宇佐)の港を拠点に、中世土佐の海運を支配した大豪族でした。

幕府の命により、尊良親王を王無の浜まで護送した船も大平氏所屬のもので、その一族である奥湊川の押領使(地頭)弾正へ親王のお迎えを命じたのも、本家の守護代大平氏ではなかったかと思われれます。



弾正横通り

○このシリーズに関するお問い合わせ 黒潮町教育委員会文化振興係(大方あかつき館内) ☎43-2110(直通)